ディドロ研究，人間論に関して

Diderot, sur la nature de l'homme

山　口　俊　治

Toshiharu YAMAGUCHI

（昭和62年11月11日　受理）

はじめに

ディドロ Denis Diderot（1713－1784年）は『百科全書』L'Encyclopédie の編集者として知られている．この全書の目的は単に各分野の知識の材料を供給するだけではなく，思考方式そのものを変革することでもあった．事業の完成には20余年を要し，次のような多くの困難を伴った．

『百科全書』の準備段階に，危険思想の持ち主としてディドロ自身が収監されたこと，出版開始のあとは，イエズス会や反動陣営による妨害，当局による配本中止や出版禁止など．これらに耐えかねて，あるいは，意見の対立から，Rousseau や D'Alember などの有力な執筆陣が中途でつぎつぎとこの事業から身をひいていったことなどである．

これらの危機はディドロの統率力によって，助手の献身的な働きによって，新しい寄稿者達によって，全書を予約している人々の支援によって，さらに，反動陣営や当局の側の有力な地位にありながら，この事業の歴史的意義を理解する人達によって，要するに「時代の意志」なるものによって，これらの危機は乗り越えられた．

みずからも『百科全書』の多くの項目を執筆し，「人知の各部門を綜合して，その間に連関と秩序を確立すること」をめざし，この仕事に夢を託し，全力を傾注したはずのディドロが，『エルヴェシウス『人間論』の反駁』の中で，『百科全書』に言及して次のように述べている．

「偶然が，と言うよりもさらに，生活の必要が私達をどのようにでもしてしまうのである．誰よりも私がそれをよく知っている．そのために私は30年間もぶっ続けで，好きでもないのに『百科全書』を作ってきたのであり，その間に戯曲は二つしか作っていないのである．」（Oeuvres.[注1] Ⅱ．p.312.）

彼が半生を献げたはずの『百科全書』を，「好きでもないのに」と言っていることに，ディドロが戯曲にいだいていた強い関心がうかがえる．彼は民衆を啓蒙するための，より効果的な手段として，戯曲に多くを期待していたのだった．

『自然の解釈に関する思索』[注2] に，「哲学を素人の眼に本当に推称すべきものと思わせる方法はたったひとつしかない．それは哲学をその有用性と一緒にして彼に示すことである．」（Oeuvres. Ⅱ．p.19.）とあるが，ディドロは戯曲によって，道徳の有用性，即ち有徳であることの利益を示そうとしたのである．『百科全書』の課題は人間の考察であり，人類の幸福の追求であったのだが，ディドロは独自の著作において，この同じ課題を，道徳を中心において，より綜合的におこなおうとした．

ディドロの思想の出発点

Shaftesburry の著書を自由訳した『真価と美徳に関する試論』(注3) の序文で述べている：「本書の目的は，美徳と神の認識とは，ほとんど不可分に結びついており，人間の現世的幸福は美徳と不可分であることを立証することにある．神への信仰がなければ美徳もなく，美徳がなければ幸福もない．これが以下私がその思想を説明しょうとする著名な哲学者の二つの命題である．」（Oeuvres. Ⅰ. p.12.）

「信仰なくして道徳はない」という命題はまもなく『盲人に関する手紙』(注4) において否定されることになるが，もう一つの命題である「道徳なくして幸福はない」という確信はさらに強化され，神に替わって人間を基盤とする新しい道徳の探求は終生の課題として続けられることになる．ディドロの道徳観は宗教観と不可分に結びついているから，宗教観の推移と関連して見ていくことが一般的であるが，この小論では「人間の性は善であるか，悪であるか？」というテーマで見てゆく．

人間の性は善なのか悪なのか

既に社会生活をおこなっている人間についてではなくて，生来の人間に関して述べられている断片から始める．

引用1）L'homme est comme Dieu ou la nature l'a fait; et Dieu ou la nature ne fait rien de mal.（Oeuvres. Ⅰ. p.164. ≪Additions.≫）(注5)

引用2）Tous les hommes sont nés sans esprit; ils ne l'ont ni faux ni juste:（Oeuvres. Ⅱ. p.343. ≪Réfutation.≫）(注6)

引用3）≪La nature humaine est donc bonne?≫
Oui, mon ami, et très-bonne. L'eau, l'air, la terre, le feu, tout est bon dans la nature;（Oeuvres. Ⅶ. p.312.）

引用4）Si l'on ne peut donner le nom de bon qu'à celui qui a fait le bien, et le nom de méchant qu'à celui qui a fait le mal, assurément l'homme, en naissant, n'est ni bon ni méchant.（Oeuvres. Ⅱ. p.406. ≪Réfutation.≫）

ディドロは『哲学的思索』(注7) において，既成の宗教を否定して，少なくとも理神論へ移行しているから，引用1）で言う神はもはやキリスト教の神ではなくて，理神論での神，即ち「理性の限界内において認められる神」，または自然の法則をさしている．引用1）と3）には性善説を支持する理神論的傾向が見られるのであるが，性善説に拠るディドロの人間善悪論を要約すると：この宇宙においては全てが有機的に結びついていて，必然的関係にある．必然なるものは悪ではありえない．善なのである．人間もこの自然の一部であるから，したがって人間の性は善なのである．

引用2）と4）では理神論からさらに科学への接近が見られる．必然なるものは単に必然であるにすぎず，これに善とか悪とかの観念を当てはめるのは誤りであるとしている．生得観念も，理神論的な目的因もともに否定し，善悪や美醜などの一切の観念が経験的なのである．

ディドロの宗教観はキリスト教を認める立場から理神論へ，理神論から無神論へと移行したのであるが，決定的に無神論を支持するようになったとされる『盲人に関する手紙』以後にも理神論的見解を表明している断章が多く見られることから，「ディドロは無神論者であったが，また一貫し

て理神論者でもありつづけた.」という見解もある.

これは次の引用に見るように，科学的考察によって到達した真理を道徳など現実社会の課題にストレートにあてはめるのは適当ではなく，かえって有害でさえあると考えたからである．貴族の間に特に顕著な道徳的退廃の風潮に無神論が加担することになりはしないかとの危惧をディドロはいだいていた：「１日か２日の間やっと外界を見た１人の人間が盲人たちの国にまぎれ込んだとしたら，沈黙を守るか，あるいは気狂いと見なされるか，どちらかの快心をしなければならないでしょう.（……）暗黒の時代に真理を探り当てるという不幸を担った人々の物語や迫害の事実，またその真理を同時代の盲人たちにもたらした人達の軽卒さ（……）」（Oeuvres. Ⅰ. p.290.）(注4)

だからディドロは，彼が科学的考察で到達した認識から，これを敷衍して，形而上学的なひとつの可能性を述べる場合，これと対立する判断の可能性の方も，慎重に同じ比重で残しておく．さらに道徳など形而上学の場合は必ずしも必然性の連鎖では解明され得ないことを次のように述べている.

引用５）［...］des phénomènes［...］(sont) nécessaires en mathématiques, en physique et autres sciences rigoureuses ; contingents en morale, en politique et autres sciences conjecturales.［...］la cause subit trop de vicissitudes particulières qui nous échappent, pour que nous puissions compter infailliblement sur l'effet qui s'ensuivra.(Oeuvres. Ⅱ. p.118.) (注8)

考察の対象が「人間」と言うように複雑なものである場合，これをより簡単なものに置き換えることが肝要であることをディドロは主張する．引用３）に端的に見られるところの「人間の本質は自然のエネルギーの一部である」とする判断はその例である．しかし，この置き換えによって本質が明確に把握されたとしても，置き換えることによって省かれた部分も，これに劣らず重要なことである．これについては後で，エルヴェシウスを批判している個所で考察するとして，論を生来の人間の善悪論に戻すと，ディドロは，人間は生まれる時は「善である」，または「無である」としているが，次に，このいずれとも少し異なるように思える判断について見て行く.

エルヴェシウスが「人間は母の胎内から生まれる時は，いかなる観念 idées も，またいかなる感情 passions も持ってはいない.」と言う時，次のように批判している.

引用６）Sans idées, il est vrai, mais avec une disposition propre à en concevoir, à en comparer, et en retenir certaines avec plus de goût et de facilité que d'autres.（Oeuvres. Ⅱ. p.378－379.）(注6)

ディドロ自身が「人間は生まれる時は無の状態である」と述べていたのであるが，エルヴェシウスが「全く何も持たずに」と言う時ディドロはこれに反駁して，≪plus de goût et de facilité≫を持って生まれる，としている．これと同じような意味で，別の個所では une aptitude propre à une chose とも言っているが，「個有の素質」あるいは「あることに適した一種の性向」を持って生まれるという思想は彼の自然科学的考察を応用しているように思われる.

人間の性の善悪に関するディドロの判断を見て行くと，「人間が生まれる時」と限定した場合でも，形而上学的判断と科学的判断とゆうように異なる次元から，従って異なる判断が見られる．また，ある一つの命題が肯定されたとしても，これによって否定されるはずのもう一方の命題が完全には否定されないことがあるから，ディドロの思想としてあるものを特定するよりも，彼が明らか

に否定したものを明確にする方が有効であろう．

宗教について言えば，彼はキリスト教など既成宗教を否定し，彼が自然宗教とよぶところの理神論的傾向もちつつ，自然の法則を唯一の拠り所とすべきとして，無神論に接近している．宗教観と人間善悪論とは大体符号するように思える．理神論的傾向から性善説を肯定し，無神論的傾向からは「人間は生まれる時は自然のエネルギーの一部にすぎない」としている．そして明らかに否定されているのは性悪説であろう．

人間は善でも悪でもある

ここでは生来の人間ではなくて，その後の人間，即ち，社会の中で生活を営んでいる人間の善悪についての断片を見て行く．

引用7）Rien n'est aussi rare qu'un parfaitement honnête homme, si ce n'est peut-être un parfait scélérat：(Oeuvres. Ⅰ. p.41.)(注3)

引用8）Hommes [...] qui vit en société, qui a inventé des sciences et des arts, qui a une bonté et une méchanceté qui lui est propre, (Oeuvres. XV. p.124.)(注9)

引用9）Il n'y a rien de si rare qu'un homme tout à fait méchant, si ce n'est peut-être un homme tout à fait bon. (Oeuvres. Ⅶ. p.156.)(注10)

3つの断片は『盲人に関する手紙』より以前のものから以後のものまで含まれているが3つの内容はほぼ同じである．ここに見られる「人間は善悪の両方をあわせ持っている」とゆう判断は，生来の人間の場合に見てきた「人間の本性は悪ではない」という思想とどのように繋げられるであろうか．

生来の人間の本質を自然のエネルギーに置き換えたのであったが，人間一般の善悪を論じる時，ディドロはこのエネルギーに相当するものとして，人間の passion をもってくる．『盲人に関する手紙』の中で≪Un moyen presque sûr de se tromper en métaphysique, c'est de ne pas simplifier assez les objets dont on s'occupe;≫（Oeuvres. Ⅰ. p.293.）と言っているように，抽象的なものを対象とする時に，これを具体的なもの，簡単なものに置き換える方法がとられる．

人間の善悪とは，人間の行動（精神活動も含む）の善悪である．人間を構成する主要な二つの要素である理性 raison と感情 passion のうち，行動の源泉となるものは passion であるとして，以下の引用のように，これを強力に弁護している．

引用10）Les passions [...] C'est dans sa constitution un élément dont on ne peut dire ni trop de bien ni trop de mal. (Oeuvres. Ⅰ. p.127.)(注7)

引用11）Les passions amorties dégradent les hommes extraordinaires. La contrainte anéantit la grandeur et l'énergie de la nature. (Oeuvres. Ⅰ. p.128.)(注7)

引用12）Ce serait donc un bonheur, me dira-t-on, d'avoir les passions fortes. Oui, sans doute, si toutes sont à l'unisson. (Oeuvres. Ⅰ. p.128.)(注7)

18世紀は passion の復権の時代であった．passion を罪悪視するキリスト教の禁欲思想をディドロは現世的幸福を追求する立場から非難している．理性が感情を完全に支配すべきとする17世紀

的思想はやや弱められていたとはいえ，やはり感情は理性の下に置かれるべきもの，あるいは，両者は対立するものとされていたが，ディドロは両者が同等であること，強力な passion は理性を強化するものであることを主張する．

引用11）に見るように passion 自体は善悪とはかかわりのないものであったし，引用12）に見るように，幸福に寄与するものでもあった．そして，passion は「人間を常に善（＝当人の欲すること，即ち幸福）へとかりたてるものであるから，彼の行為が悪（他人の幸福に危害を加えること）をおこなったとしても，その責任は passion 自体にはない」のであった．

ディドロにおいては宇宙は一元のものであって，全てが連続しているから，passion と raison もまた決して対立するものではないと考えた。だからキリスト教徒や観念論者たちを，次のように，その二元論性と非連続性において非難している．

引用13）　O chrétiens! vous avez donc deux idées différentes de la bonté et de la méchanceté, de la vérité et du mensonge.（Oeuvres. Ⅰ. p.166.）(注5)

引用14）　L'indépendance absolue d'un seul fait est incompatible avec l'idée de tout; et sans l'idée de tout, plus de philosophie.（Oeuvres. Ⅱ. p.15）(注2)

ディドロは人間の善悪を本有的なものとしてではなく，現実的利害関係で説明し，人間が善でも悪でもありうる理由を次のように述べている．

引用15）　Il y a, dans la nature de l'homme, deux principes opposés; l'amour-propre, qui nous rappelle à nous, et la bienveillance, qui nous répand. Si l'un de ces deux ressorts venait à se briser, on serait ou méchant jusqu'à la fureur, ou généreux jusqu'à la folie.（Oeuvres. Ⅶ. p.181.）

このように人間の善と悪という二つの現象は自己愛 amour-propre という形の passion の複合体と複合体との対立に起因するものである。自己愛は人間が生存するための必須のものであるから，これを抑え込もうとするのではなく，ひとつの自己愛を形成している幾つかの passion の間に調和を確立することが要求される．

ここから，ディドロの思想的出発点であったもう一つの命題「道徳なくして幸福はない」については次のように具体的に説明される。即ち，個人においては一つの感情の行きすぎを他の感情によって抑制し，感情相互の間に統一を確立すること．個人と全体の関係においては，精神と心情の一切の性向を彼の種（＝人類）全体の一般幸福に適応させること。そして，個人の幸福を全体の幸福に一致させる過程には，やはり一種の自己犠牲なるものが不可欠であるとしている．

この自己犠牲は彼が既成宗教において非難する禁欲の思想とは異なるもので，個は全体と必然の法則に従って有機的に結びついているという考えに基づいている．このような道徳観はディドロにみられる幾つかの道徳観の中でも代表的なものであろう．以上はディドロがキリスト教を批判しながら作っていったものであるが，ここには「宇宙における完全なる調和」を認めるところの理神論的傾向がうかがえるように思える．次に，より唯物論に近づいて道徳を考察している断片について見ていく．

道徳の科学

神を否定した『哲学的思索』につづく『自然の解釈について』の中で，哲学する方法について述べている．

引用16）Tout se réduit à revenir des sens à la réflexion, et de la réflexion aux sens: rentrer en soi et en sortir sans cesse,（Oeuvres. Ⅱ. p.14.）

引用17）Tant que les choses ne sont que dans notre entendement, ce sont nos opinions; ce sont des notions, qui peuvent être vraies ou fausses, accordées ou contredites. Elles ne prennent de la consistance qu'en se liant aux êtres extérieurs.（Oeuvres. Ⅱ. p.13.）

引用16）の「たえず自己に立ち帰り，また自己から出ること」とは，神の証言なるものや既成の体系に拠らずに」ということであったのだが，さらに，引用17）にあるように，その観念が客観性と，真実性をもつためには，外部と結びつくことが要求されるのである．

『盲人に関する手紙』の中で「自分の存在と自分のうちに継起する感覚しか意識しないで，他のものを認めない哲学者を，いわゆる観念論者である」と非難している．善悪の規準から神を排除し，これに代って人間の感覚が置かれるのであるが，感覚は誤ちを犯し易いものでもあるから，自己の内部において考察されたある命題が客観性と永続性をもつためには，検証の過程を経なければならない．

人間の善悪や道徳についてもやはり実験科学的に考察されなければならなかったとして次のように述べている．

引用18）Comme je n'ai jamais douté que l'état de nos organes et de nos sens n'ait beaucoup d'influence sur notre métaphysique et sur notre morale, et que nos idées les plus purement intellectuelles, si je puis parler ainsi, ne tiennent de fort près à la conformation de notre corps, je me mis à questionner notre aveugle sur les vices et sur les vertus.（Oeuvres. I. p.288.）(注4)

そして，彼（＝ある生来の盲人）の証言によって，彼が精神的苦痛を感じる対象が我々「目あき」とは大いに異なること，善なるものでなければ美ではありえないこと，善の観念は常に実際の効用と結びついていること等から，彼の道徳は我々の道徳とは大部異なるものであることが判明する．だから「我々の善（＝vertu）は我々の感じ方，および外部の事柄が我々に与える印象の度合に依存する」（Oeuvres. Ⅰ. p.289.）のであった．

『盲人に関する手紙』は人間が認識を獲得してゆく過程についての当時の科学的論争を題材として，ディドロが自己の思想を表明しているのであるが，ここではキリスト教が完全に排除されると共に，自然の驚異，不可思議をその証とする理神論もまた否定されている．理神論が根拠とする「至上の知的存在」：動物の身体の驚嘆すべき構造も太古の昔から不変のものではなく，初期においてはより簡単なもので，多くの不完全さをもっていたこと，現在の姿は適者生存の結果にすぎないこと，「偉大なる秩序」，「永遠の秩序」なるものも，刻々変化する一瞬の姿にすぎないのであった．

このように宗教も形而上学も道徳の根底とすることを拒否したディドロが人間を説明するときに重視するのは，より肉体的なものであるから，人間の行動の原理を次のように述べている．

引用19)　Nous n'apportons en naissant qu'une similitude d'organisation avec d'autres êtres, les mêmes besoins, de l'attrait vers les mêmes plaisirs, une aversion commune pour les mêmes peines: voilà ce qui constitue l'homme ce qu'il est, et doit fonder la morale qui lui convient. (Oeuvres. Ⅱ. p.241.) (注11)

ディドロは「人間の行動の原理は，精神活動も含めて，苦痛を避け，快感を求めることにある．」と考えたのであるが，エルヴェシウスが「快感と苦痛とはつねに，人間の行動の唯一の原理である．」と断定する時に，次のように反駁する．

引用20)　Sans doute , il faut être organisé comme nous et sentir pour agir; mais il me semble que ce sont là les conditions essentielles et primitives, les données *sine qua non*, mais que les motifs immédiats et prochains de nos aversions et de nos désirs sont autre chose. (Oeuvres. Ⅱ. p.302.) (注6)

キリスト教や形而上学を批判する場合には人間を passion や sentiment によって説明したのであったが，宗教や観念論をしりぞけた後，これに代って人間の独自性を考察するには，動物の行動一般の条件をそのまま人間の行動の動機とみなすことでは不十分であると考えた．

エルヴェシウスが人間の行動の原理とする快感，即ち肉体的感性とは肉体的なものだけを指すのではなく，精神的なものもこれに還元されていて，具体的には，富や名誉，死後の栄誉の意識，なども含まれているのであるが，ディドロがエルヴェシウスに同意できない最大のひとつは，彼が人間の行動すべてを外的条件のみによって規定されるとする点である．

ディドロは人間を神から解放し，自由なる存在にしたのであるから，人間は自立するものでなければならなかったから，例えば，作家たちが本を書くという行動をとる場合，彼らが思索するという行動をおこなう原因を次のように主体性によって説明している．

引用21)「彼らは人類の不幸を目にして」

[...] c'est ainsi qu'ils se soulagent du besoin qu'ils ont de réfléchir et de méditer, et qu'ils cèdent au penchant qu'ils ont reçu de la nature cultivée par l'éducation, (Oeuvres. Ⅱ. p.314.) (注6)

人間の自由と，これと対立する要素をもっている必然性との関係は彼の大きな課題であったが，考察を別の機会に譲るとして，ディドロがエルヴェシウスを批判するもうひとつは，彼が人間全体をある明確な規準によって一律に説明できるとする点，および彼の体系性であった．ディドロは人間相互の観念の不一致について述べている．

引用22)　Quelque bien organisées que soient deux têtes, il est impossible que les mêmes idées soient dans l'une et l'autre également évidentes. Je ne crois pas que ce principe puisse être contredit. (Oeuvres. Ⅱ. p.312.) (注6)

このことは特に『盲人に関する手紙』において原理的に考察されていたのであったが，ディドロは「人間はそれぞれ自分の体質や性格などによって，あの観念よりはこの観念というふうに，ある観念を特に好んで結びつけるものである.」(Oeuvres. Ⅱ. p.312) として，人間が思索することの独自性を強調している.

人間考察の目標は道徳の確立であり，そこから幸福へとつながらなければならなかったのであった. ディドロはこのような形而上学的考察に先立って，あるいは，これと交互に，自然科学的考察，即ち人間の身体の機能や脳の働きなどに関する考察に相当のエネルギーをつぎこんでいた. 人間という動物は，実験科学的考察段階においてでさえ，その綜合的解明が困難であることを痛感していたのであった. だから「我々は万人に共通するモラルを作らなければならない.」のではあったが，断定や体系化を急ぐべきではないのであった.

『百科全書』の中で≪Abstraction faite de mon existence et du bonheur de mes semblables, que m'importe le reste de la nature?≫ (Oeuvres. XⅣ. p.453.) といっているように，あくまでも現実の人間の幸福を中心におくこと，そして「我々は天と地との間にある無限の距離を知っている. それでも我々は塔を建てることをやめない.」(Oeuvres. Ⅱ. p.13.) のであるが，いたずらに無限に向って塔を高くしていくのではなく，有用性がその限度を定めるのであり，自然が結論を出すのであった.

おわりに

ディドロの道徳論の結論としては幾つかが考えられると思うが，その代表的なものは「個人の幸福を全体の幸福に一致させる.」とする，多分に禁欲的なものであろう.

他に『ラモーの甥』の中の≪Il y a deux procureurs généraux, l'un à votre porte, qui châtie les délits contre la société; la nature est l'autre. Celle-ci connaît de tous les vices qui échappent aux lois.≫ (Oeuvres. Ⅴ. p.451－452.) に見られるような自然主義的および市民的性格を持つものや，≪Toute action vertueuse est accompagnée de satisfaction intérieur; toute action criminelle, de remords; ≫ (Oeuvres. Ⅰ. p.160.) (注7)

≪Ne pensez-vous pas qu'on peut être si heureusement né, qu'on trouve un grand plaisir à faire le bien?≫ (Oeuvres. Ⅱ. p.510.) (注12) にうかがえるところの，善の「自足性」ともいえる思想も見られる. これら自然主義的性格と善の「自足性」もまたディドロに顕著である. さらに，一人の人間の中で「性格の統一」をすべく，何ものにも拘束されずに passion を最高度に発揮すべきであると主張するところから「彼は無道徳論者であった」と評されるところのディドロの一面もある.

注1) Oeuvres complètes de Diderot ed. par J. Assézat, 1875.
〃2) Pensées sur l'interprétation de la nature, 1754.
〃3) Essai sur le mérite et la vertu, 1745.
〃4) Lettre sur les aveugles, 1749.
〃5) Additions aux Pensées philosophiques, 1770.
〃6) Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé l'Homme, 1773.
〃7) Pensées philosophiques, 1746.
〃8) Entretien entre d'Alember et Diderot, 1769.
〃9) Encyclopédie.
〃10) Dorval et moi, 1757.
〃11) Supplément au Voyage de Bougainville, 1772.

〃12）Entretien d'un philosophe avec la maréchale de * * *, 1776.

参考文献

小場瀬卓三，平岡昇監修『ディドロ著作集第1巻』法政大学出版局，1976.
小場瀬卓三，平岡昇監修『ディドロ著作集第2巻』法政大学出版局，1980.
本田喜代治，平岡昇訳『モラーの甥』岩波書店，1983.
吉村道夫，加藤美雄訳『盲人書簡』岩波書店，1949.
濱田泰佑訳『ブーガンヴィル航海記補遺』岩波書店，1950.
中川久定訳『ブーガンヴィル航海記補遺』(『世界の名著』29.)，中央公論社，1970.
小場瀬卓三『ディドロ研究上巻』白水社，1961.
中野好之訳，E・カッシーラー著『啓蒙主義の哲学』紀伊國屋書店，1962.
中野好之訳，L・スティーヴン著『十八世紀イギリス思想史（上）』筑摩書房，1975.
大津真作訳，フランコ・ヴェントゥーリ著『百科全書の起源』法政大学出版局，1979.
平岡　昇，市川慎一訳，J・プルースト著『百科全書』，1979.
桑原武夫編『京都大学人文科学研究所報告，フランス百科全書の研究，(1751－1780)』岩波書店，1954.
Yves Benot, ≪Diderot, de l'athéisme à l'anticolonialisme≫ FM Fondations, 1981.
Charles Avezac-Lavigne, ≪Diderot et la Société du baron d'Holbach≫ Slatkine reprints, 1970.